

1 音楽科の本質について

私たちの周りにも、子どもの周りにも、音や音楽は満ちあふれている。好むと好まざるとに関わらず、いつでもどこでも、様々な音や音楽が耳にとび込んでくる。その多くは、傍らを流れ去るが、中には心を強く揺さぶるものもある。この心の揺さぶりは、音楽学習の積み重ねによって、感動や憧れとなって私たちを満たすようになる。このような視点に立って音楽科の本質を見たとき、私たちは次のように考えた。

音や音楽へ自ら関わり楽しむこと

音楽学習に課されたものには、文化伝承、情操育成、学習指導の3つの役割があると言われている。

文化伝承としては、歴史の中で生まれた音楽的価値の高い音楽を学ぶと共に、文化の創造という面も求められる。情操育成としては、生涯豊かな心で音楽に関わり、心の教育の一端を担う役割である。学習指導としては、音楽的諸要素の習得と表現力を向上させる役割である。

小学校での音楽科の大きな目的は、一人一人が感性を育みながら生涯にわたって音楽を愛好する素地を身につけることが必要であると考えている。そのために、音や音楽に対して、子ども達が主体的に関わり、聴いたり表現したりする活動を繰り返し行い、楽しみながら上記の3つの役割を習得していくことが、音楽学習のあるべき姿と考えた。

以上のように私たちは音楽学習を捉え、自ら関わりながら音や音楽を楽しむことこそ、音楽科の本質であると位置づけた。

2 本質にもとづく基礎・基本について

子どもは、様々な環境の中で、各々異なる音楽経験を経て小学校の音楽教育に臨む。個々の差はあるものの、学習で育成される力は共通している。音楽に関わる状態別に、私たちは3つの区分をした。

①音や音楽を受けとめ、意識する状態

②音や音楽を感じ取り、工夫する状態

③ねらいを持って、音や音楽を聴き表現する状態

この状態は、家庭や社会における音楽活動にも当てはめることができる。子どもが、3状態で力を蓄え音楽科の本質に迫るための基礎基本を、私たちは次のように定義した。

音楽のよさを見いだし 聴いたり表現したりする喜びや楽しみを味わうこと

音楽のよさとは、単に音の美しさだけではなく、音や音楽の音楽的価値そのものである。リズム、拍子、速度、和声などの音楽的要素で構成された総体的なよさを意味している。よさを見いだすことができれば、音や音楽への主体的な取り組みが可能となるだろう。

聴くこと（鑑賞活動）や表現すること（演奏活動）の対象は、鑑賞曲や教材曲、自ら創作した音や曲、ふとしたきっかけで出た音など、授業の中で扱う全ての音や音楽である。それらの対象に心を引かれ、喜びや楽しさを感じながら活動することが、継続的に音楽学習を行うエネルギーになることは間違いない。

子ども達が上記の3つの状態で、音や音楽に主体的に取り組む、喜びや楽しさを感じながら学習することが、自ら音や音楽に関わる力を培うことになる私たちはとらえた。

3 音楽科における「学び」について

音楽科の学習を通した「個」の確立した姿とは「個々の音楽性がグループや学級全体の表現に反映されると共に、その表現活動自体が個々にフィードバックされ感性を高める姿」と考える。この姿に迫るためには、音楽科特有の、関わる力、追求する力、創造する力、高め合う力が必要と考えている。それらの力と、本校の全体論という「4つの培いたい力」との関連について考えてみる。

音楽に触れるスタートは、目の前にある音や

音楽に能動的に関わろうとする姿勢を持つことにある。たとえ、音楽的価値の高い音楽が身近にあっても、関心がなく否定的に受け止めるとすれば、力は育たない。音楽的には【かかわる力】として位置づけるものは、意識的に関わろうとすることであり「発働する力」と言い換えることができよう。

次に、想いや願いを持って音楽表現を求めようとする【追求する力】について考える。自らイメージした音楽を実現させるために、過去の音楽経験を生かした表現活動を模索し追求する力は、「見通す力」と言い換えることができよう。

音楽へのイメージを高め、豊かな表現へと創り上げる活動は、「個」の部分がかなり大きなウエイトを占める【創造する力】である。個から集団へと音楽が発展し、共に聴き合い認め合うという【高め合う力】を身につけることで、音楽学習の成果が現れる。「見つめる力」「ネットワークする力」は、特に区分できないが、上記の最終段階に培われるものと考えられる。

「4つの培いたい力」を音楽科の学びの中で位置づけるとすれば、「発働する力」と「見通す力」は、過去の音楽経験や既習事項の中から生み出される、学習の初段階での力であるのに対し、「見つめる力」「ネットワークする力」は、学習の深まりの中でより明確に培われる力であるということができる。

4 題材を構想するにあたって

音楽科では「個々の音楽性がグループや学級全体の表現に反映されると共に、その表現活動自体が個々にフィードバックされ感性を高める姿」が、「個」の確立された姿であると考えて、この求める児童の姿に迫るために以下の4つの視点に基づいて、題材を構成することにした。

(1) 音や音楽への自発的な働きかけを促す

子どもが初めて音楽に触れる教材との出会いの場は、想いが表現や鑑賞に向けて膨らもうとする大切な場である。教材曲が子ども達にとって大きな魅力を感じられるものとなるように、出会わせ方には様々な工夫をしていきたい。

これは単に教材曲に限らず、低学年での音遊び、音探し、音づくりを扱う際の学習材でも同じことが言える。

(2) 音楽的活動の場を保障する

音で確かめ、音で共感し、音そのものの音楽的価値を求めるなど、一人一人の音に関わる活動を可能な限り保障したい。

私たち教師は、子ども一人一人の思いを表現に生かすために必要な技能を、効果的に効率よく教えることが求められる。表現する段階になって、表現方法がその子にとってどうしても必要になったときにこそ、技能習得のための練習が意義を持つと考える。

同じように、楽典的要素についても、必要とされたときに学習することが、より鮮明で明確な学習意義を持つ。

(3) 音楽的活動の共有化を図り自分の

表現の見直しを促す

自分の思いが独りよがりになって表現に現れたり他の音楽を受け入れないまま終結することがないように配慮したい。具体的には、表現活動の前にイメージを話し合う、表現活動の途中で友だちの演奏を聴き合う、同じ思いを持つ子同士でグループ演奏をする、発表会を開きお互いの演奏を聴き合い認め合う、などの場を大切にしていきたい。それぞれの場で思いの交流を図り、次の自分の音楽に生かすことが、より豊かな表現を促すと考える。

一方で、子どもの思いが集団の中で埋没しないように、小集団での話し合いを重ねたり、思いの移り変わりをメモし、ポートフォリオとして残していくことも試行していきたい。

(4) 自己評価 相互評価 教師の評価を

通して自分の表現に自信を持つ

一瞬で消えていく音や音楽の自己評価を文章で行うことは難しい。そこで「どんな自己評価の観点があるか?」「どんな方法で評価することが効果的か?」を、学年の成長段階、題材、活動段階に応じて検証したい。

私たちは、自己評価のみならず、相互評価や教師の評価を織り交ぜる総合的な評価活動のあり方をさぐりたいと考えている。音楽科では、次のめあてや目標を持つ際の、教師の言葉かけや支援が子どもの自己評価に大きく影響すると考えられるからである。

5 実践例 ー 4 年 ー

(1) 題 材 楽器と友だち（リコーダーアンサンブル）

- (2) 目 標 ・リコーダーの高い音の基本的奏法を身に付け、2、3、4拍子のそれぞれの拍の流れに乗って楽しく演奏できる。
- ・楽器の組み合わせによる表現の効果を感じ取り、アンサンブルのよさを味わって聴くことができる。

(3) 指導にあたって

本題材の基礎・基本について

この題材は、おもにリコーダーを中心とした器楽アンサンブルをして楽しむ題材である。友だちと二人で2重奏したり、グループでアンサンブルをする。その際互いに聴きあってピッチを合わせ心も合わせて演奏できるようになることをねらっている。また、管楽器によるアンサンブルの曲を鑑賞し、管楽器に親しみをもつようにもしたい。

ここでは「サイクリング ヤホホ」「歌とゆめと」「花笛」「月の夜」を教材曲として扱う。前3曲は、リコーダー2重奏の曲で、子どもはこの中の2曲を選んで、友だちと2重奏して楽しむ。「月の夜」では、リコーダーの高音域の音の中で、簡単な創作をする。また、リコーダーや木管・金管アンサンブルを鑑賞して、音色の組み合わせの美しさを感じ取る。

従って、本題材の基礎・基本は、リコーダーの演奏技能を、高音域にまで広げて身につけることによって、より豊かな表現をめざすと同時に、楽器の組み合わせによるアンサンブルの効果や美しさに気付くことととらえた。本題材の学習を通して、音楽的な技能のみならず音を自分でつくっていくことの大切さや喜びを感じ取らせることができればと願っている。

単元計画（総時数6時間）

主 な 活 動 と 内 容	「個」の確立した姿に迫るために	自己評価のポイント
1. リコーダーアンサンブルのめあてをもつ リコーダーアンサンブルを楽しもう ・いろいろな曲を3年生で演奏したよ ・もっとたくさんの曲を演奏したい	①②	リコーダーアンサンブルに関心を持ち リコーダーの技術向上へ意欲をもってとりくもうとしている
2. ファ ミの音の出し方を思い出して 演奏する 〈ファ ミの音に慣れよう〉 ・ファ ミの音の出し方を確かめる ・ファやミを使った曲を演奏する ・「サイクリングヤホホ」「歌とゆめと」の2重奏をする ・2曲のうち1曲を選んで演奏し互いに聴きあう ・サブテキストの「花笛」を2重奏し互いに聴きあう	①②③④	ミとファの音の指使いに慣れ 曲の中でスムーズに演奏でき 2重奏をして楽しむことができる
3. サミングの指使いを知る 〈高い音を響かせよう〉 ・高いミ ファ ソの指使いを知り練習する ・「月の夜」を演奏する ・つづきのふしづくりをする	①②	高いミやファやソの音の出し方を知りサミングの指使いに慣れる
4. アンサンブルの曲を鑑賞する ・「月の夜」のリコーダーアンサンブルを鑑賞し気付いたことや感想を発表しあう ・いくつかの 木管・金管楽器を知る ・木管・金管アンサンブルを鑑賞し リコーダーとの違いを知る	①③④	「月の夜」を楽譜を見ながら演奏できる 後半に続くふしを即興的につくって演奏できる
	①②④	学習を振り返りリコーダーアンサンブルについてそのよさを感じ取り今後の学習に生かそうとする意欲が表れている

「個」の確立した姿に迫るために

① 一人一人の音や音楽への自発的な働きかけを促す

2重奏では、合わせることの楽しさが実感できるよう、簡単なメロディから成る小曲を数曲扱う。これらは音域もさほど広くなく少しの練習で演奏できるようになる。短いので覚えやすく、3度や6度のハーモニーが美しい。すぐに友だちと合わせたりリレー形式で演奏できるので、子どもが自ら取り組みやすいと思われる。「月の夜」の続きのふしづくりでは、細かなステップを踏んだ学習過程を組むことで、子どもが意欲を持ち続けて積極的に活動できるようにしていきたいと考えている。

② 音楽的活動の場を保障し、明確なめあてをもたせる

一人一人が自分のリコーダーの音を自分で確かめられるように、一人で音を出す場をできるだけ多く作っていく。音を自分の耳で確かめながら演奏することで、音に敏感になり、より美しく正確なピッチを求めようとするだろう。また、2拍子、3拍子、4拍子の拍の流れに乗って演奏できるように、伴奏を入れる、個に合わせてテンポを変えるなどの支援を行う。さらに交互奏もして楽しむ。音楽の流れの中に自分を置くことで、子どもが自らこんな音を出そう、こんな演奏をしようというはっきりとした意識を持たせたい。

③ 音楽的活動の共有化を図り、自分の表現の見直しを促す

友だちの前で演奏し、互いに聴き合う場を意図的に多く設けていく。そうすることで、自分の表現と友だちの表現とを聴き比べ、自分の表現を見直すきっかけを作る。その際、音の長さ、タンギングの仕方などのアーティキュレーションに関わる教師からの支援を行い、表現の見直しにつながるよう働きかけていく。

④ 自己評価、相互評価、教師の評価を通して自分の音楽的表現に自信をもつ

続きのふしづくりの場では、①ミ ファ ソのサミングの技能、②4拍子の拍の流れに乗って5つの音符の中にミ ファ ソの3つの音を入れて演奏する即興性の2つが要求される。細かなステップに分けた学習過程のそれぞれで自己評価や相互評価、教師による評価を適宜行うことで、確実に身につけたことを自覚させたい。また、互いに教え合ったりアドバイスすることができれば、つくる喜びと充実感を味わい、自信が深まると期待できる。

(4) 本題材における授業の実際と考察

—児童の実態と評価の場の設定—

子どもは、ソプラノリコーダーに大変関心を持っている。1年間の学習を経て、ソ～レまでの左手による音の出し方 → ファ、ミ、レ、ドの右手も使った音の出し方、の順で学習を進め、たくさんの曲の演奏を楽しんできた。4年生になった時点でリコーダーの演奏技能に関して次のような実態であると分析した。則ち、

- ・タンギングはほとんどの子どもが上手にできている。
- ・ファの指使い（バロック式）に抵抗がある子どもがいる。
- ・レやドの音は、まだ指が届きにくい。
- ・さらに高い音を探り吹きでみつけ、演奏してみようとする意欲的な子どもがいる。

そこで、ファの指使いに慣れ、サミングによる高い音の出し方を覚えることで、演奏可能な音域をさらに広げることをねらって題材を設定した。それは、本題材における「個の確立した姿」を「より広い音域でリコーダーを演奏することで個々の思いがより豊かに表現できる姿」ととらえるからである。そして題材を構成する際には、細かなステップを踏んだ計画を立て、一人一人の子どもが確実に技能を習得し感性を高められるような配慮をしたいと考えた。そのために、

①ミとファの指使いに慣れ、曲の流れの中でスムーズに演奏できるようになる場

②高いミやファやソの音の出し方を知り、サミングの指使いに慣れる場

③サミングを使った曲を演奏し、即興的なふしづくりをする場

④リコーダーや木管、金管のアンサンブルの曲を鑑賞し、アンサンブルへの関心をさらに高める場

を設けることにした。それぞれの場において、学習課題に対する意欲、技能の習得、音楽的よさ

を感得する力などを振り返ることで自己評価を行う。同時に相互評価や教師による評価を加えることで4つの培いたい力との関連も考えて実践に臨んだ。考察するにあたっては、これらの評価を通して、抽出児を中心に、子どもが自分の活動をどのように振り返り、自分のよさに気付いていったか、また相互評価や教師による評価をどのように生かしたかについて、それらの妥当性や反省点を含めて書き進めていく。尚、抽出児は技能の習熟が壁となって「自分は音楽が（リコーダーが）苦手だ」と考えているM児、N児そしてY児の3人である。

①ミとファの指使いに慣れ、曲の流れの中でスムーズに演奏できるようになる活動における考察（自己達成評価を中心に）

ここでの活動は、新しい技能を習得するものではなく、以前に学んだことに習熟するための活動である。

まず、ファ、ミの指使いを一人ずつ音を出しながら確かめる。教師は指使いと同時にタンギングをチェックした。子どもは互いの音を聴きながらうなずいたり教え合ったりしていた。簡単な相互評価の場と言える。

次に、「サイクリング ヤホホ」と「歌とゆめと」〔教科書（東書4年）〕を一通り演奏できるように練習した後で、どちらか1曲を選んで友だちと2重奏するよう指示した。これまでも簡単な2重奏の経験はあるので、仲良しの友だちと二人組を作ってすぐに取り組んだ。しかし、演奏の堪能な子ども同士、苦手な子ども同士のペアが多く、すらすらに演奏できるようになるまでの時間差が大きかった。ペアを作る際に何らかの配慮が必要であることを感じた。

バロック式のファの指使いにさらに慣れるために、「花笛」〔サブテキスト（笛星人）〕を次の課題として与えた。前の曲よりも長く、少し難しい。また、アーティキュレーションの工夫も要求される曲である。ここでは教師は男女のペアになるように指示した。どちらかという女児にリコーダーの得意な子が多く、不得意な子に教えようとする姿が期待できそうだと思われたからである。これらの活動の後、自由記述でふり返りを行った。

M児のふりかえり

- 1 ミとファはかんたんだった
- 2 サイクリングを選んだ
- 3 Aさんと合わせた
- 4 花笛はRくんと合わせた
- 5 いつも同じところで失敗してしまうのでRくんにわるいなと思った 上手になりたい

N児のふりかえり

- 1 ミとファはかんたん
- 2 サイクリングを選んだ
- 3 Kくんと合わせた
- 4 花笛はTさんと合わせた
- 5 Tさんが優しく教えてくれたけどうまくできなかった Tさんはこわくなった

M児、N児、Y児ともにミとファを1音ずつ出すことは簡単にできたようである。他にも、そこでつまずいた子どもはいない。たった一つの音を出すという簡単な活動では「関わる力」は十分に発揮されている。また、一人ずつ音を出して確かめる方法をとったために、自己評価や到達の自覚がしやすかった。

2曲のうち1曲を選んでの演奏は仲良しの友達で行った。M児、N児は少しの練習でできるようになったが、Y児は自分と同じようなレベルのS児とペアになったためにかなり手間どっていた。「追求する力」を十分つけるにはペアの組み方やグループの作り方などへの配慮と同時に子どもの人間関係への配慮も必要と思われる。

そこで、せめてできるだけ多くの友だちと合わせる機会を持とうと考えて「花笛」は、男児は女児と、女児は男児とのペアを作るよう指示した。

M児は、リコーダーの得意なR児とペアになった。すらすらと演奏するR児に対して、いつも同じところで間違えてしまうM児。R児がM児をせめることはなかったが、M児はR児に申し訳なく思い、リコーダーが上手になりたいと書いている。この気持ちが明らかな「関わる力」となって生きることを心から願ったものである。教師の支援が必要とされるところである。

Y児のふりかえり

- 1 ミとファはかんたん
- 2 歌とゆめを選んだ
- 3 Sくんと合わせた
- 4 花笛はEさんと合わせた
- 5 Eさんはわらってたけど
わかりやすく教えてくれた
のでできるようになった

N児は、いつも熱心なT児とペアになった。T児は熱心さのあまりに厳しく接し、N児は「こわくなった」ようだ。

Y児は、E児に優しく教えてもらってとても楽しそうな様子だった。このあとの活動でもときどきE児に教えてもらっているY児の姿をみるようになった。Y児とE児にさらに良い関係が生まれてほほえましい。

子どもの人間関係も生かしてペアを決めることができる
とさらなる効果が期待される。

②高いミ、ファ、ソの出し方を知り、サミングの指使いに慣れる活動における考察 (自己達成評価および相互評価)

低い音（ファ、ミ、レ、ド）の出し方を改めて理解した子どもの意識は、今度は高い音へと向かった。教師がサミングでミ、ファ、ソと吹いて見せると「指は同じだ」「強く吹けばいいのかな」「ファは違うようだ」などの反応があった。そこで、左手の親指を立てることを教え、そのような指使いをサミングということを知らせた。



教師は初め、「三日月を作る」とサミングの仕方を話したが、親指を不自然に動かす子どもが何人かいた。以前から、親指を横にして穴をふさいでいた子どもが多かったようである。一人ずつ親指の使い方を確かめながらサミングの指導を行った。その後、小グループに分かれて互いの音を聴き合い確実に音が出せるようになったら、黒板に示した音符にシールを貼って確かめ合った。

この活動では、教師が一通り指導した後は、子ども同士で確かめ合って相互評価をすることが励みになっていたようである。4年生の子どもにとっては、新しい音に出会ってもある程度のレディネスがあれば、互いに教え合ったり、確かめ合ったりすることで「追求する力」が発揮でき、学習を積極的に進めていくことができると考えられる。とにかく一方的な技能指導に陥りがちな場で思いを新たにした。

③サミングの技能を使った曲を演奏し、即興的にふしづくりをする活動における考察 (自己達成評価および教師による評価)

「月の夜」〔教科書（東書4年）〕は、8小節からなる簡単な曲である。その第1フレーズの後半2小節にミ、ファソを使ったメロディをつくって演奏して楽しむ授業である。

子どもはまず楽譜通りに演奏し、読譜D.C, Fine.などの基本的事項を学んだ（楽譜ア）。その後で楽譜イと共に課題を提示した。

反応の早いKa児やNa児はすぐにメロ

月の夜



ディをつくって演奏してみせたり、乗りやすいYo児はミミミミミミと演奏して笑いを誘った。ほとんどの子どもが「簡単にできそうだよ。」と言い合う中で、抽出のM児、N児、Y児はやや複雑な表情を見せていた。

授業では、Yo児のようなミミミミミミーやファファファファファ、ソソソソソソといった同音を並べるものも否定せずにいたが、ほどなく「違う音の方がいい音楽に聞こえる。」「次に続きやすい音を見つけたよ。」などの声が挙がるにつれてさまざまな音でふしづくりをして楽しむ様子が見られるようになった。

ここでも前時と同じように友だちに聴いてもらった後で、全員の前で発表する場を設けた。また、授業が終わった時点で図1のようなふりかえりを行った。

以下、抽出児の様子を述べる。



今日の音楽の勉強について

名前(小市真琴)

1 サミングができましたか

2 「月の夜」の曲のえんそうが、できましたか

3 つづきのふしをつくることができましたか

4 なぜ そのように 思ったのですか

5 聞いていて上手だなと思った人はだれですか

6 つづいたふしを書いてみましょう

(みか)月の夜



小さなステップごとに「できた」という実感を持たせるべきであろう。このような子どもこそ、「関わる力」や「追求する力」を培うための教師の支援が大切であると考えます。N児は創作したふしの題を「満月の夜」としていた。満月のように美しいふしをつくりたいと願っていたのだろうか。今後ともN児に心をとめて授業に臨んでいきたい。

Y児

授業の初めに、一人ずつサミングの仕方を音で確かめる場面があった。Y児はきれいな音を出し、親指の位置もしっかり決まっていた。友だちからも教師からも賞賛されたY児は、その後もずっと積極的に授業に参加し、わからなかったりできなかったりしたことは、すぐに周りの友だちに尋ねるなど、意欲的な様子だった。「つづきのふしは、上手に作れた。」とふりかえり「自分で何でもできたのでとてもよかった」と記している。ちょっとしたきっかけで満足できたことを実感し、以後意欲をもって取り組む姿が見られたのは、教師として嬉しい。

M児

サミングは確実にできていた。親指の位置も正しかった。楽譜通りの「月の夜」の演奏は「上手にできた」とふりかえりのメモに書いている。つづきのふしづくりに関しては「まあまあ」と記し、その理由を「考えはあるけど、リコーダーでいいのにふけなかった。」としている。以前に「一緒に演奏することになった友だちに申し訳ないから、上手になりたい。」と書いていた児童である。「創造する力」をM児に培うには、機を逃すことなく教師が働きかけ励ましていく必要があると痛感した。教師や他児からの励ましで自信をつけていくと信じたい。

N児

サミングはできていた。親指の位置については意識しないと正しくならない。「月の夜」の演奏は「あんまりだめだった。」と記している。「追求する力」が十分とはいえないN児には細やかな配慮が必要であり

④リコーダーや木管、金管アンサンブルを鑑賞し、アンサンブルへの関心を高める活動における考察（自己達成評価および教師による評価）

フランス民謡「月の夜」の若松正司編曲による変奏曲を鑑賞した。これは、第1部リコーダーアンサンブル、第2部木管アンサンブル、第3部金管アンサンブル、第4部リコーダーアンサンブルで、それぞれのつなぎの部分は弦楽アンサンブルで演奏されている。それぞれの楽器の特徴がつかみやすく子どもは楽しんで聴くことができた。それまでの学習を経て育った音楽的な力がこのような場面でネットワークし、音楽をより自分に近付けて聴くことができたのではないかと考える。

「関わる力」や「追求する力」で問題があると思われたN児はこの曲の鑑賞で「金管楽器は弾んで聞こえたので踊りだしそうだったし、木管楽器は落ち着いて静かに聞こえた。リコーダーとはずいぶん音が違っていただけれど、どれもすごくきれいだった。」と記している。たとえ鑑賞の場面であっても自分の想いを率直に表現できたN児は、この題材の学習で大切な何かをつかんだと評価したいものである。

—実践を終えて—

自己評価に関して

子どもの自己評価は、必ずしも教師の評価と一致するものではない。抽出のY児は、ふしづくりの授業ではすべてがうまくいっていたが、「もう僕は上手になったんだ。練習しなくてもいいんだ。」と話して、次の時間は散漫で十分な結果が得られなかった。またM児は、ほとんど到達していても自己評価が厳しく、「まだまだ十分でない。」と考えるために次第に消極的になってしまっている。自己評価した後、新たな課題に対しても前向きに意欲を持続して取り組むには、教師による適切な評価も常に行わなければならない。とくに本実践のような技能の習得が中心の授業では教師や友だちによる客観的な評価活動が大切である。

4つの培いたい力との整合性に関して

全体論でいう4つの力を音楽科では次のようにとらえてきた。

発働する力 —————▶ 関わる力
見通す力 —————▶ 追求する力

見つめる力 —————▶ 創造する力
ネットワークする力 —————▶ 高めあう力

「関わる力」「追求する力」に関しては、子どもの音や音楽に対しての取り組みのあり方を考える上でその整合性があると考えられる。しかし、「創造する力」や「高めあう力」は扱う領域や題材、目標によってさまざまに変化、複合化し、そのまま「見つめる力」や「ネットワークする力」と合致するとは言えない場合がある。ふしづくりの場では、「創造する力」と「追求する力」の区別をつけがたいし、より美しい音楽表現を求める場では、「追求する力」と「高めあう力」は混然一体となっている。今後はさらに実践を重ねながら4つの力についてのとらえを明確にしていきたい。